

恐ろしいトキソプラズマ 妊婦はとくに注意を

さいきん、家畜や食肉を通じて人間もトキソプラズマ症にかかるおそれがあると問題になっています。

トキソプラズマの病原虫は、細菌よりやや大きく、いぬ、ねこ、ぶた、うし、ねづみ、やぎなど、わたくしたちの身近ににいるあらゆる動物がもっています。

この病原虫が人間にうつる経路は、病原虫をもっている動物の内臓や肉をなまのまま食べたり、排せつ物の飛まつを吸いこんだり、傷口から体内に入ってきます。

トキソプラズマ症の特徴は、病原虫が体内に入ると、すぐ体中にまわることです。とくに脳へ行くとこどもは精神薄弱小児症などの脳障害をおこし、先天性トキソプラズマ症のこどもは約12%が死亡します。

しかし、病原虫が体内に入ると必ずトキソプラズマ症にかかるわけではありません。おとなわもちろん、こどもでも満1歳をすぎればこの病気に対する抵抗力

が強くなり、それほど心配することもないようです。

もつとも恐ろしいのは先天性の場合です。妊娠中の婦人がこれにかかり、胎児に病原虫が移っていく場合です。胎児に感染すると、感染の度合いが強い場合は流産か死産し、無事に生れても新生児期から生後4カ月の間に貧血、けいれん脳炎などの症状をおこしています。

トキソプラズマ症を防ぐには、妊娠中は病気のいぬやねこなど家畜に近づかないことがなにより大切です。とくに農家では、妊婦にぶたやうしの世話をさせないように家族の協力が必要です。

また、食肉を調理する場合はよく加熱することが大切です。なお、妊婦が調理する場合は、生肉にさわった手は必ず良く洗うように注意してください。

なにはともあれ、成人の約20%はすでに免疫をもっているといわれていますので、むやみに恐れる必要はありません。しかし、万一に備えみんながトキソプラズマ症に対する認識を高め、感染しないように注意してください。



【トキソプラズマはいぬやねこからうつります。妊娠中の婦人はとくに気をつけてください】

今と昔

今と昔

昭和放水路 ⑨

浮島沼の周辺は、江戸時代から新田開発にもつとも適した土地でした。しかし海面と沼面の差がわずか1mくらいしかないので、大雨で沼に滞水すると5日も6日も水が引きませんでした。このため、沼の周辺に新田を開くには、沼の滞水を一刻も早く引かせることが先決問題でした。

原宿（現在の沼津市原町大塚）の増田平四郎はこの点に着目し、幕府に6回も直訴を行ないました。

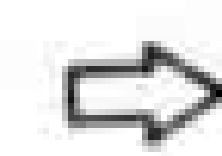
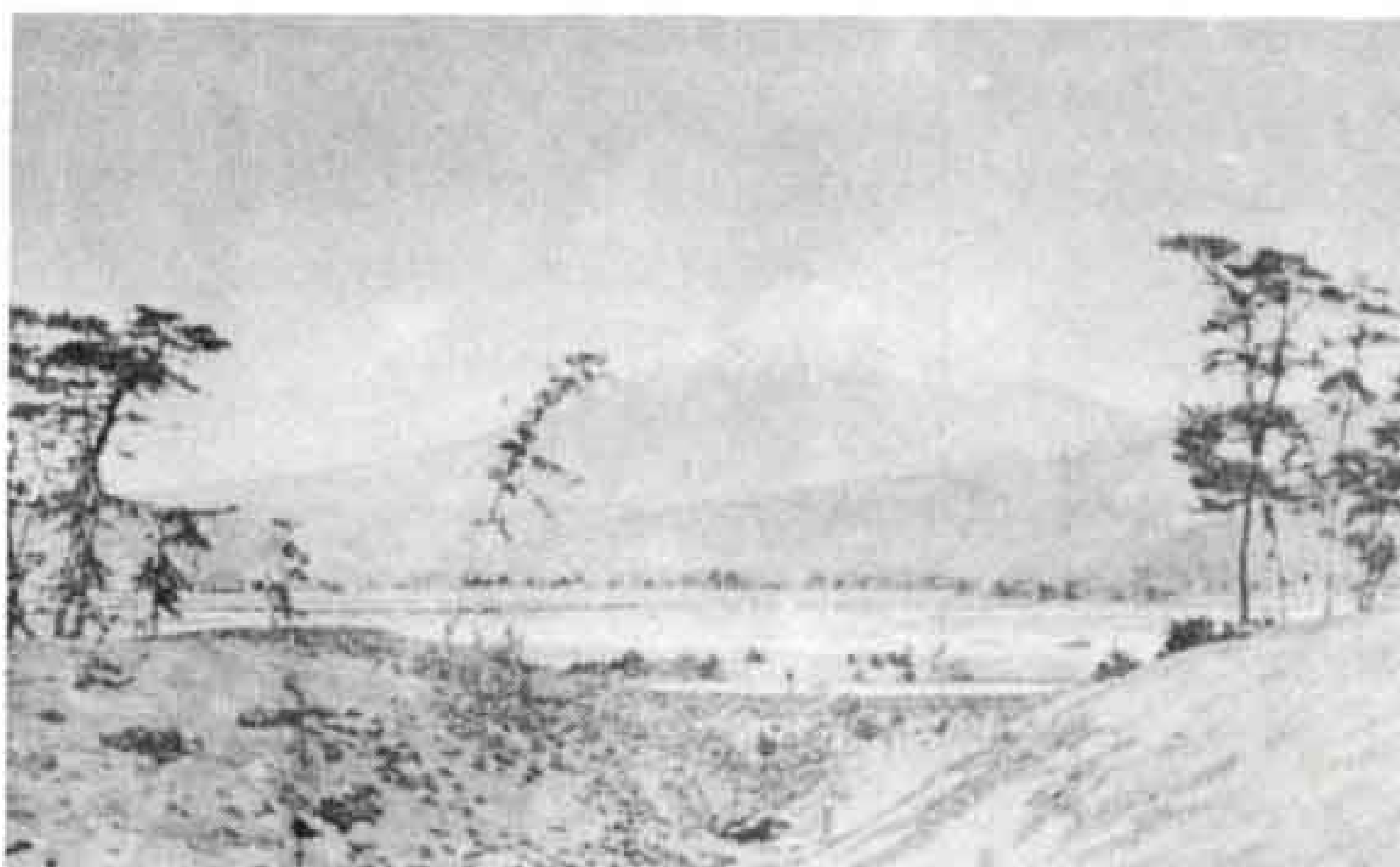
そして、親類や地元の反対をおしきり、慶応2年（1866年）西柏原新田と田中新田との間（今の昭和放水路のところ）に俗にいう「スイホシ」を完成させました。このスイホシは長

さは約550m、工費は5,800両、延10万6,500人の人足を使用してできた大堀割でした。ところが、完成して間もなく土用波で一瞬にして壊滅してしまいました。

しかし、明治に入り沼周辺の開墾が進むにつれ、ますます排水溝の必要にせまられました。そして現在の昭和放水路が昭和12年2月に着工され、5年の歳月をかけ完成しました。

昭和放水路は平四郎のつくったスイホシと同じ場所につくられました。これをもつても平四郎の着想が非凡であることがわかんと思います。

左の写真は増田平四郎がつくったスイホシの跡（明治の初め）です。右は現在の昭和放水路です。（鈴木富男稿）



■ 犬の放し飼いはやめましょう。